

映画音楽という世界 ～医療と音楽と心の関係～

作曲家 茂野 雅道 先生

映画音楽 ～音楽による演出～

私にとって、映画の音楽を作るということは、音楽作品を作ることはありません。
映画そのものを作ることで考えています。

音楽による演出。

もちろん映画における一番の演出家は監督です。

監督がキャスト、スタッフに、今回作りたい映画はこういうものだという全体の演出意図をまず伝えます。

そして、それを基にそれぞれのパートで、映画を技術と感性で表現していきます。

例えば撮影に関しては、撮影監督(カメラマン)が監督のイメージする映像をどんなアングルでどうやって撮影するか、どのような光を映像に写し入れるかなど考えながら進めていきます。これも、撮影による演出といえます。

映画の音楽作りは、どこのシーンにどんな音楽を入れるかを考えるところから始まります。

シナリオを読み、ときに撮影に立ち会い、少しずつ音楽のイメージを膨らましていきます。

その後、編集された映像に合わせ、全体のテーマ曲、各シーンの音楽を具体的に作っていきます。

映画の音楽は、映画のために作るものであり、映画の中に入っていることで成立する音楽です。

役者のセリフや周りの環境音、自然音、効果音などと一緒に存在させるものです。

そして、音楽を入れることで、そのシーンに意味、感情、表情を加えていきます。

喜怒哀楽、そういった人の心を、役者の演技だけではなく、音楽でも表現することができるのです。

有名な映画音楽家が言った言葉「観客の目に涙を溜めるのは監督の仕事。その涙を落とすのが音楽の役目」

映画音楽は映画を音楽で演出しているのです。

音楽 ～人の心への影響～

音楽が映画を演出するということで、その音楽を作ること自体がとてもやりがいのあることになるのですが、よく考えると、実は少し怖いこともあります。音楽はシーンに与える影響力が強いのです。

音楽による、人の心への影響。

悲しい場面に楽しい音楽を付けると、役者がどんなに悲しい表情をしていても、そのシーンは楽しく見え、また、笑っている場面に悲しい音楽を付けると、役者の表情は悲しい笑い顔に見えてしまうことがあります。

付ける音楽によって、そのシーンの見え方、感情が違って見えてしまうのです。

音楽によっては、そのシーンが元々の意図と違った意味になってしまう可能性がある、ということでもあります。

これは作曲家にとって怖いことなのです。それ故、音楽を作るときはとても慎重に進めなければなりません。

監督の演出意図を理解し、曲調を考え、メロディーを作り、楽器の種類などを決めていきます。

作った音楽を編集された映像に合わせて何回も観て、この曲でいいのか、曲調を変えたらどう見え方が違ってくるのかなど、いろいろ試し、検証し、試行錯誤しながら作っていきます。長い時間をかけて作業をします。

音楽がその映像に寄り添い、役者の演技と絶妙に交わり、最適な状態でシーンに存在したとき、作品は素晴らしい仕上がりになります。

また、さりげなく自然にシーンに溶け込むように作った音楽が、観客の心に無意識に、そして印象深く残っていたとしたら、それは嬉しいことです。

映画音楽は音楽だけを聴く目的で作ってはいません。しかし、その映画を観た人が後日別な場所でその音楽だけを聴いたときに、映画のそのシーンを思い出したとしたら、それは作った者にとって嬉しいことなのです。これも、音楽による人の心への影響といえます。

～医療と音楽と心との関係

医療の現場では、患者に対して、治療とともに心のケアが大切になる場面が多いと思います。

患者に勇気、生きる希望を持たせるために、医師や看護師は、あるときは優しく、あるときは厳しく接し、話しをすることがあるでしょう。

医師、看護師の言葉が患者の心に与える影響は大きいはずです。

患者に何をどう伝えるかを判断するとき、医師、看護師が大切にしていることは、患者をより理解することではないでしょうか。

患者への理解、作品への理解

医療と音楽とで共通する部分はさまざまなところであると思います。

音楽を作るとき、また、そのシーンで何をどう伝えるかを判断するとき、この映画はどんな作品なのかを理解することが作り手にとってとても重要になります。

映画で、描いている場面は絶望的な状況でも、音楽では絶望の中の一筋の光を表現することがあります。

こうすることで、悲しむヒロインの表情の中に、観客は僅かな希望を感じることができます。

映画のラストシーンでヒロインが絶望から抜け出す展開の場合、事前のシーンで音楽に希望を予感させる音を僅かに入れておくことで、ラストシーンでの感動を高めることにつながるのです。

ときに医療の現場では、患者に対しあえて何もしないということを選択することがあると思います。

これも患者を理解した上での心のケアの一つだと思います。

同様に映画でも、シナリオの段階では音楽を入れようと構想していた場面で、撮影後、編集段階において音楽を無しにするという判断をすることがあります。音楽を無くすという音楽による演出、ともいえます。

役者の演技、セリフ、同時に録音された自然音、環境音が素晴らしいとき、あえて音楽を入れないほうが、そのシーン、そして映画全体が良くなるとあるのです。

何もしない勇気、何もしないことの大切さ。

この場合も、患者への理解、作品への理解、これがとても大切になるのだと思います。

～この時代、次の世代、変わったこと、変わらないこと～

映画の制作現場、使用機材環境、映画館での上映形態はここ数年で大きく変わってきました。

撮影、上映でフィルムを使うことは激減し、デジタル撮影、デジタル上映になりました。

映画の音も2チャンネルのステレオから5.1チャンネルなどのサラウンドに変わってきました。

このデジタル化の流れはこのままさらに進み、かつてのアナログ時代へ戻ることはないのかもしれませんが。

しかし、それは使用機材の変化だけのことです。

音楽の場合、録音、編集、再生する機材がデジタルに変わっただけのことです。

音楽そのものは、それを理由に変わることはないのです。

むしろデジタル機材の進化によって原音再生能力が上がったことは、音楽制作者にとっては嬉しいことです。

演奏時の音を劣化させることなく、忠実に映画の中に入れることができるようになりました。

さらにサラウンドにより立体的な空間の中で音を表現できるようになったのです。

映画の音楽は、よりダイナミックに、より繊細に、より自由に、監督、作曲家のイメージを素直に描くことができるようになっていくと思います。

人の心に響く映画、そして音楽。次の世代に向けてこれからも作り続けていきたいと思っています。